

風韻（１） 「ある時は職を逐はれき」

新井 俊郎

連載に当って

これまでの『酔筆』は、「悠遊会」と言う絵描き仲間の発行している会報に書き継いで来たものである。会の性格から、なにか絵画に関連するテーマを要求された。『風韻』にはこんな制約は全く無い。自由奔放に書ける。一切の職を退いたのが1987年6月だったから丸々17年経つ。満年齢で88歳7ヶ月、数え年齢で90歳になった。お陰で、「浮世の柵（しがらみ）」は、全く無くなった。欲を言えば、自由自在に書きたいものである。

時として、絵画についての文を書いたら悠遊会会報に転載するし、挿絵入りだったら群大工学部会報に転載する。今後は「東西南北の会」のこのホームページを根城とし、或はメンバー諸君を相手にして、或は世間一般を念頭において書こうと思う。

ある時は職を逐はれきある時は捨てにきやうやく八十二年

（短歌の場合は本仮名使いを用いる。ただし、ルビは新仮名使いにする。）

私は大正4年12月30日生れである。だから、戦前の数え歳で言うと私は2日間で1歳を終え、正月元旦には2歳になった。敗戦後、満年齢になったのは、アメリカ占領軍の御節介だろう。江戸時代の元服は15歳が多かったから満年齢では僅か13歳で成人式を挙げたわけだ。今で言う少年である。何れの年齢がいいか。私の場合は3日で2歳年齢を重ねるのだから、油断出来なかった。これが、満年齢になったとき分った。正月が来て2年儲けたと思った記憶がある。いま考えると、毎年2年怠けて来た蓄積は取り返しがつかないなと思う。20歳台の2年と30歳台の2年は違う。ましてや、50歳台80歳台の2年は全く違う。異質である。ここに気がつかなかった。少なくとも、40歳台に気づいていたら、もっとまじな人物になれたのではないのか。

上の歌の八十二年は、満年齢である。誕生日に詠んだ。「逐」は放逐（ほうちく）の逐である。追放された、馘首されたということだ。「捨てにき」は職をこちらから捨てた、軽蔑する上司に辞表を叩きつけた、ということである。

私は大正に11年、昭和に63年、平成に16年生きて来た。だから、幼年時代を大正デモクラシーの真っ只中に、少年時代・青年時代をこの余韻覚めやらぬ昭和初期に過した。アメリカ占領軍から「戦後民主主義」を強制されたときには、既に30歳になろうとしていた。だから、影響を受けずにすんだ。

大正デモクラシーといっても、私は吉野作造を一冊も読んでいない。読んだのは、哲学書で言えばは出隆（いでたかし）の『哲学以前』であり、西田幾多郎の『善の研究』であった。端的に言えば、前者はドイツ語の“sollen”を基底にした自由主義思想であり、英語の“should”に比べ遥かに道徳的に厳しい。後者は純粹経験（主客合一の世界）から出発して徹底的に自由自在を追求欣求する思想である。

「職を逐はれ」たのも、職を「捨て」たのも、私には私なりの青春に育んだ「自由」の尺度があったからである。（具体的な話は幾つかに分けて、他日物語りとして書いて見たい。）

（2004-6-17）